

との関係が上手くいかなかったり、地域の中での孤立感・不安感から、ひきこもりやうつ状態になってしまったり、飲酒の末に入院してしまふこともあり、退所後の継続した支援も必要とされています。

そこで施設では、平成14年に利用者O B会を立ち上げ、翌年から利用者O B等のための通所・訪問事業を開始。年間500件を超える連絡や相談があり、施設のイベント等に声を掛けて、仲間づくりを進めています。

「地域の中で自立していくためには、施設を利用している間に、地域に溶け込む経験を積んでもらうことが大切」と館長の江森幸久さん。利用者と共に近隣の清掃活動を継続してきたほか、地域ケアプラザの「ちよ



昨年度の「ちよこつとボランティア」参加者は延べ747人。施設のお手伝いや清掃などを行っています

こつとボランティア」への参加にも力を入れています。

「利用者の多くは生活保護を受給していることや、障害・疾病により社会参加に消極的になりがち。だからこそ、地域住民からの『ありがとう』の一言が大きな励みになる」

地域の中で施設利用者の歩みを支えていくために、施設として自治会に積極的に参加し、地域のため、住民のためにできることを探し続けています。また区社協の「南区社協施設部会」において、社会福祉施設の種別・分野を超えたネットワークづくりも進められています。

### 市民参加型の地域福祉を拓く ラポール藤沢（藤沢市）

特別養護老人ホーム「ラポール藤沢」を運営する、幅広いいき福祉会は、「生活クラブ生協神奈川」を通じて7万人のカンパと自己資金をもとに設立された法人で、市民の参加と協働に主眼を置いた取り組みを進めています。

大きな特徴は、「ワーカーズ・コレクティブ」（以下、「W.Co」と）との協働です。W.Coとは、市民が生活者の視点から、地域に必要な「もの」や「サービス」を市民事業として事業化し、市民自らが出資・経営し、労働力となる組織のことで、現在9つの団体が施設運営に携わっています。

「ともすると、施設職員は忙しい日常に身を置いてしまいがちだが、W.Coならではの市民目線の気づきが、よりよい支援を引き出してくれ」と施設長の阿部充宏さん。市民への働きかけについては、「その人の動きをみると、とても施設の片手間でできることではないと感じる」と評する。W.Coによるボランティアコーディネートを取り組み方にヒントがあるようです。

「なぜボランティアに参加したのか。活動後にどのような思いの変化があつたか。自分の住み暮らすまちの福祉がどうあつてほしいか、そのために施設はどうあるべきか。一人ひとりの考えを丁寧聞いていくことで、市民の皆さんが自然と次のステップを踏み出してくれる」

W.Coにボランティアコーディネートネーターを依頼してから、ボランティアは3倍以上（年間約2千人）となり、平成21年から始めた「市民と共に育ち合う講座（キャリアパス講座・親子福祉体験講座）」についても、講座修了者のO B会を中心に企画・運営が行われるなど、市民参加が一歩ずつ進められています。

### 地域福祉推進の拠点機能を 発揮するために

3施設では共通して、地域を支え、地域に支えられる施設づくりを目指

し、地域住民の悩みにアンテナを張り、双方向の関係性をつくつていくという意識がうかがえます。

平成22年の厚労省調査によると、本県には社会福祉施設が2244カ所あり、身近な地域における地域福祉の推進拠点として大きな期待が寄せられます。その一方で、福祉施設では、発達障害など人間関係を築くことが難しい方や、虐待・DV（家庭内暴力）・生活困窮・国籍など、さまざまな要素が絡み合う方など、より丁寧な関わりが求められています。

介護・福祉の深刻な人材不足の中、施設利用者一人ひとりに沿った支援を目指しつつ、地域からの期待にどのように応えていくか、厳しい現実にも直面しています。しかし、福祉施設が地域との関係を築くことは、利用者の生活課題を共に考え、地域の方を見直す輪を広げていくことにつながるのではないのでしょうか。

本会経営者部会・施設部会（※）では、社会福祉法人・社会福祉施設等の公益性を生かし、地域福祉を進めるさまざまな主体と連携しながら地域貢献活動をこれまで以上に発揮できるように、取り組みを進めています。

※本会会員には、社会福祉法人等の経営団体で構成する「経営者部会」と、公私社会福祉施設からなる「施設部会（10種別協議会）」があり、本県の福祉課題について協議し、研究・研修等を進めています。

（企画調整・情報提供担当）